

## 薪を取る女

小島 瑛禮\*

三十年ほど前、八丈島に滞在したとき、薪は女が山から取って来るものであると聞いた。どんな大きな木でも、頭の上に載せて運んだという。なぜ男がやらないのかと訊ねると、薪を使って炊事をするのは女の仕事だからという。私よりは十歳は年輩の女人であったから、今なら八十歳に近いであろうか。居合わせた、その人の縁続きという同じ年頃の男の人も、そうだったよねと声を掛けられると、うなずいていた。

八丈島には、女は頭の上にものを載せて運ぶ習慣がある。女がすることだから、男は絶対にしないという人もいた。それにしても、あのごつごつした堅い木まで頭の上に載せるとは、いかに習慣が、徹底した統制力を持っているものであるかと驚いた。生活の形とは、その社会の精緻な機構の一部分であって、歯車一つでも変化することが許されないのであろう。そういうえば、やはり女の頭上運搬がある新島では、逆「へ」の字形に上にそった天秤棒を頭の上に載せて、肥桶まで運ぶ写真を見たことがある。

昔は島の女の暮らしはたいへんだったということで、薪取りの話がでてきた。男の人に同意を求める表情にも、そんな思いがはつきりと現れていた。乗り出して語る素振りには、体中で女の仕事がつらかったことを訴えているようにおもえた。言外に、男はやらなかつたんだからという批難さえ感じさせる気迫があった。たしかに、山に入って枯れ枝を取り、枯れ木を集め作業は、荒い労働である。家の炊事に必要な分をすべてまかなうとなれば、女にとっては、大きな負担であったにちがいない。

江戸時代の八丈島では、黄八丈が貢納品であった。黄八丈といえば、その作業にたずさわるのは女達である。お上に納める糸の仕事をする女の手が荒れると困るので、八丈島では女はけつして農耕作業にはかかわらないといわれてきた。島の人に聞いてみても、同じ答えが返ってくる。いや、島の生活の組織が事実そうなっていたから、女は機織、男は農耕という男女の分業が八丈島にはあると信じられてきた。しかし、これに、薪取りは女の仕事という条件が加わることになる。それはまた、きわめて重大な事実である。

素手でやれば、薪取りは手が荒れる作業にちがいない。それをあえて女の仕事にしてきた以上、女は手が荒れると困るから農耕はしないという島に知られた論理は、ただそのままでは受け入れることができない。むしろ糸の技と炊事は女の分担という生活の規範が、八丈島では機能していたことになる。衣食は女のものという、分業の思想である。女が農耕に従事しないという習慣は、もっと複雑な島の生活の体系にかかわっていたとみるべきであろう。

---

\*琉球大学名誉教授

八丈島の稲の水田栽培には、きびしい宗教的な規制があった。水田の灌漑を管理する役の水守（みもり）は、隠居した男の仕事で、稲の栽培期間、水守館と呼ぶ小屋にこもり、自炊生活をするのが本来であった。女のつくったものは食べてはならないといい、血の忌みや死の忌みにも注意した。一般の人々でも、忌みのある人は水田に入ってはならないともいい、不幸のあった家の水田のごときは、ほかの人が代わって耕作したという。女はこれから農耕にかかわっていないから、ことさらには女についての制限の伝えはないが、かえって、そこにこそ、女を農耕にかかわらせない理由があったのではないかともおもえる。女が耕作にたずさわらないのは、禁忌であるということになる。

薪取りは女の仕事であるという習慣は、八丈島以外にも、それなりにあったのかもしれない。私が育った神奈川県の愛甲郡愛川町の半原では、一年間の燃料の確保は、マキヤマの配分にあった。ムラの共有林のちょうどよく成長した雑木林を、それぞれの家の経済に見合うように、大・中・小などの大きさに区切ってマキヤマにする。希望によってその大きさを選び、鋤引きでどの区画か場所をきめて配分し、各自が自分のマキヤマから切り出して、マキヤソダにして家に蓄えた。それは男たちの冬の大きな作業であった。しかし冬枯れの季節、日常的な燃料になるスギッパ（枯れた杉の葉）や、カレッコ（枯れ枝）を取ったり拾ったりするのは、女たちや、学校から帰って来た子どもの仕事であった。

八丈島の習俗を知つてから、ほかにもそういう土地がありはしないかと注意してきたが、まだはっきりした事例には出会っていない。ただ十数年前、ヨーロッパで一年近く過ごしたとき、書物や絵画を見ながら、もしかしたら、ヨーロッパでも、女たちが薪取りに積極的にたずさわった時代があったのではないかとおもいはじめた。

最初に私の目をひいたのは、ウィーンあたりの振り売りのことを書いた本である。背丈ほどもある長い薪の束の下の方を、頭の上に掛けた帶で支えて背負っている女の絵がある。薪売りの女であるという。これは販ぎ女であるが、もし女が薪を取る習慣がなかったら、こんな仕事も発生しなかったのではないかとおもってみた。ちょうど、京都の大原女を連想させる。大原女は、あまり大きくない薪の束を頭の上に乗せて、京都の町を売り歩いた。こちらもただただ男たちの作った薪の束を、女が売り歩くようになったともおもえない。

森の中できを集めている女の絵は、オーストリアでも美術館やなにかで見たような気がするが、いま手近に確かな資料があるのは、オランダのハーグにあるメスターク・パノラマ館が所蔵する、シェンティエ・メスターク・ヴァン・ホーテン（1834—1909）の作品である。「森の冬」と題する、88×178という縦長の油彩画で、雪が積もっている森の中の道に、薪を横に背負って立つ女の後姿を描く。道の両側には高く伸びた大木の冬木立があり、人間は画面の十分の一ほどの背丈で小さい。あきらかに、薪取りの女であろう。

気がついてみると、フランスの画家、ジャン・フランソワ・ミレーにも薪取りをする女を描いた絵がいくつもある。画集やいろいろな展覧会の目録にも見えているし、そのいくつかは私も実見している。1849年の春に、ミレーはフォンテーヌブローの森のはずれにあたるバルビゾン

の村に移った。その森で得た着想である。フォンテーヌブローの森は本来は国有林であったが、周辺の農民には、中世以来、生活用の薪拾いと放牧が許されていたそうである。四季の農民の生活のさまざまな作業を描くことを考えていたミレーにとって、薪拾いは欠くことのできない冬の主題であったという。私がひそかに求めている、ミレーの絵画による生活誌でも、当然重要な主題になる。

ミレーの原画をA・ラヴィリエが木版画にした1853年の『田園の労働』には、その一枚に、男が斧を振りあげて薪を切りそろえる絵がある。また1850～51年の油彩画「薪を集める人々」では、薪を束ねる男と二人の女を描き、女の一人は斧で枝を切りそろえ、一人は束ねるために薪を並べている。これらで見るかぎり、薪取りは男も女も従事する作業であり、とりわけ男は力仕事をしているように見える。1850年のデッサン（黒鉛筆）でも、束ねた薪を両手にさげている女のほかに、薪を束ねている男とそれを手伝う女を描いている。解説では、それを木樵と妻たちとしている。

しかしバルビゾンへ移ってすぐのころ、1850年ごろの油彩画「薪取り」では、三人の女だけを描いている。森の中でおおきな倒木を運び出そうとする女二人が中心で、その奥には、薪を横に背負って立ち去ろうとする女がいる。ここには男の姿はない。これは一つの実景であり、生活の形の表われではなかったかとも見える。1854年ごろという黒コンテ「森から帰る薪拾い」も背丈ほどの薪を背負った女三人を描く。中心になる女の像は、体の左側に長い木の幹まで引きずっている。こんな薪拾いの画題の展開をたどっていると、男は女たちの手伝いにすぎなかつたのではないかとみえてくる。

このような十九世紀中葉の絵画に一つの示唆を与えるのが、舟田詠子さん制作・著作のビデオ『パンの民俗誌』に映像のある、ドイツ南西部のヘンゲン村のパン焼きのための薪取りである。この村には、共同のパン焼きかまどの小屋があり、村の家々の女たちは、都合のよい日を選び、鍼引きで順番をきめてパンを焼くが、そのときつかう薪は、家の女たちが森から取ってくる習わしになっていた。一月にブナの木を切って枯らしておき、四月に森に行って、その枝を7.80cmに切りそろえて束ねてくる。日本でいえばソダに相当する薪である。ブナの木を切るのがだれかは紹介されていないが、おそらくは家の男たちか、職業的な木樵であろう。

ブナの木の幹が画面に見えていないのは、木を切った人たちが、それぞれの目的に利用しているからであろう。暖房や日常の炊事につかうマキにするのかもしれない。いずれにせよ、薪取りが、パンを作る仕事にたずさわる女たちだけでおこなわれていたことは興味深い。ミレーの絵画でも、薪を運ぶ姿はすべて女であり、やはりヘンゲン村と同じ男女分業の原理がはたらいていそうである。食物の調理を分担する女たちが、そのための薪まで調達するという習俗である。ここまでくると八丈島と異ならない。

われわれ人間の社会は、さまざまな論理によって機能している。八丈島の男女分業の論理もまた、その一例である。人間は論理によって生き、社会を築いてきた。その論理こそ、人間とはなにかという、人間が人間として存在するための命題を解く鍵である。民俗学もまた人間認

識の学問として、社会の論理をムラの生活の中に求めてきた。それが人間にとって、もっとも本質的な論理であるという思想である。しかし八丈島でも見たように、事実を知ることは簡単でも、眞実まで悟るということはなかなかむずかしい。人間の肌身に近づけば近づくほど、眞実を認識することに困難がともなう。自然科学が、あたかも、眞実を探求するために方法を切り開く学問であるように、民俗学もまた、深く眞実を追い求める努力を重ねなければならない。薪取りは女がするものであるという日本の習わしの眞実も、目をヨーロッパにまで広げることによって、一層はつきりとみえてきた。民俗学が民俗学であろうとすれば、当然比較民俗学という視点が生まれてくる。人間が人間を知ること、それが世界が仕合せになる第一歩である。比較民俗学は、その推進役でなければならない。

#### 新刊紹介

エリク・ミュグラー著

#### 『野鬼の時代－西南中国における記憶・暴力・場所－』

1980年代半ばから90年代初期にかけて中国の少数民族について現地調査を行ったアメリカ人研究者たちが2000年前後にその成果を著作に結実させて刊行し、多くの成果を読むことができるようになった。Susan D. Blum, *Margins and Centers : A Decade of Publishing on China's Ethnic Minorities, The Journal of Asian Studies*, 61 - 4 , 2002, pp. 1287 - 1310は中国少数民族に関するアメリカの研究書7冊がまとめて回顧されている。その中で最近読む機会があり、少数民族の民間信仰の視点から宗教と中国国家というテーマを探究した研究成果として注目すべきが本書である。著者は1962年生まれのミシガン大学助教授で人類学者である。本書は著者が1991年から93年に雲南省北部の楚雄彝族自治州内の直苴という小さな盆地に滞在して、在地の儀礼の専門家に教えながら彝族社会の民間信仰を研究した成果である。私も90年代後半に四川の彝族の宗教を調査したことがあったので、大変興味深かった。

本書は九章立てで、子を生む女性の身体、住む家屋、地域の共同体、想像される国家というようにレベルをあげながら論を展開し、最後にまた計画出産に脅威を感じる女性の身体にもどってまとめている。その目次は1. 序章 2. 身近な無限 3. 空虚なる枠 4. 谷の家 5. 消化される言葉

6. 幽靈国家 7. 痛みの地理学 8. 野鬼の時代 9. 壊された瓢箪となっている。

この地域の彝族社会では、1960年から61年の大躍進直後の大勢の飢餓死、65年の祖先崇拜制度の暴力的破壊による祖靈の野鬼への変化などにより、祖先を含む非常死の死者たちが野鬼となって破壊の関係者に祟ることが続いており、儀礼の専門家が野鬼を送るための儀礼をする機会が増えた。著者は詳しい口述資料や彝語による儀礼資料に基づいて野鬼の物語りと野鬼を送る儀礼を記述し検討する。

例えばある女性に祖靈が憑依して、「どうしてこんなこと（祭祀制度をこわすこと）をしたんだ。祭祀制度をもと通りにもどせ」と主張する事例等を取り上げて、著者は野鬼の話を、「過去における暴力とその暴力が現在と未来に回帰していくことに対して人々が皆で倫理的にどう応答するべきか、その方法を模索して作りあげるための手段としてこれらの物語りを読むことができる」という。少数民族の側から現代社会の変動を見ようと真摯に取り組んだ著者の気迫が伝わる重要な著作であると思う。（丸山宏）

Erik Mueggler, *The Age of Wild Ghosts Memory, Violence, and Place in Southwest China*, University of California Press, 2001 ,360pages